

世界共生学部におけるアカデミックスキルズのねらいと課題

Goals and Lessons of Academic Skills in the School of Global Governance and Collaboration

宮川公平 地田徹朗 松本純子 堀部純子
Kohei MIYAGAWA Tetsuro CHIDA Junko MATSUMOTO Junko HORIBE

Bishwa Raj KANDEL 近藤野里 小野展克
ビシュワ・ラズ・カンデル Nori KONDO Nobukatsu ONO

1. はじめに

2017年に設置された世界共生学部では、他学部と同様に、2年次以降の専門課程において必要とされる研究のためのスキル、すなわちアカデミックスキルズを初年次教育として導入している。本学部設置からすでに5年目になり、大枠に大きな変更は加えていないものの、実践内容に関しては修正を加えている。本稿では、世界共生学部のアカデミックスキルズが採用する授業方式の採用経緯と授業のねらい、初年度の実施内容と振り返りから浮き彫りになった課題点、次年度以降の修正点とコロナ禍での対応について概観し、今後対応が必要と思われる点を明らかにしたい。

2. 世界共生学部のアカデミックスキルズの当初の狙いと修正

2-1. 採用しているアカデミックスキルズ授業スタイルの導入経緯と初年度の体制

アカデミックスキルズは、同じ名称で全学的に実施されているものの、その内容や実践方法は学部・学科によって異なる。大きくは、外国語学部型、現代国際学部型、国際教養学科型に分けることができるだろう。外国語学部型は、現在のように「全学共通基幹科目」が設置される前、外国語学部総

合教養が設置されていた時期にさかのぼる。総合教養では、一年次に「基礎ゼミ」の名称で少人数クラスを編成し、総合教養所属の教員と非常勤で、現在外国語学部や世界教養学部で実践されているアカデミックスキルズの土台となる内容を実践していた。現代国際学部型は、主に国際教養学科が設置される前の現代国際学部で設置されていた「研究基礎トレーニング」にさかのぼる。研究基礎トレーニングは、当時この授業のコーディネーターであった教員の発案で、企業が新人社会人に行うチームビルディングなど、アクティブラーニングの要素と日本語基礎力を学ぶ内容を組み入れていたものであった。この内容を、コーディネーター教員と非常勤で実施する形式を採用した。そして、現在現代国際学部の現代英語学科及びグローバルビジネス学科では、内容を日本語基礎力に重点を置いた形に修正を加え、実践している。国際教養学科型は、2013年に新学科として設置される際に1期「キャリアプランニング」、2期「アカデミックスキルズ」の名称で導入された。1年生の1期にキャリアプランニングという、「時期が早いのでは」という意見もあると思われるが、単なる就職活動準備の位置づけではなく、長い目で自身のキャリア形成を見つめるための意識づけとして、また、題材として全国はもちろん中部地区の優良企業を取り上げることで、就職活動が大企業一辺倒にならないようにする視点の形成を意図していた。2期のアカデミックスキルズでは、国際教養学科の2年次以降の専門研究のベースとなるような文献を輪読し、その内容を人前で発表することを通して、レジュメ作成や資料収集や分析など2年次以降の専門教育に耐えうる技能の習得を目指すものとした。国際教養学科ではこうした内容を専任教員が実施する形式を採用した。

前置きが長くなったが、世界共生学部のアカデミックスキルズは、最後の国際教養学科の方式を学部設置当初に採用した。すなわち、専任教員が担当し、1期・2期ともに人前での発表スタイルを採用し、内容面では1期はキャリア形成を意識し、2期は専門研究につながる文献を用いた基礎的スキルの習得を目指すものとした。そのために設定した学習目標と授業のねらいは以下の通りである。

〈学習目標〉

- 学問研究に不可欠な視座・手法の獲得。
- プレゼンテーションに必要な基礎技術の獲得。
- レポート作成に必要な基礎技能の獲得。

〈授業のねらい〉

- 大学での学びとは何かを理解する。
- アカデミックスキルズとは何かを理解する。
- アカデミックスキルズに求められる作法の修得。
- じっくりと取り組む姿勢・主体的学びの姿勢を獲得する。
- 定義を明確にする・主観的判断からの脱却。

他方、導入に当たって世界共生学部の独自性を打ち出すため、同学科のスタイルとはいくつか意識的に異なる部分を設けた。異なる主な部分は以下の通りである。

〈担当教員について〉

- ①1期と2期で担当教員の完全入れ替え
- ②担当教員のジェンダーバランス考慮

教員組み合わせ表

	1期 AS	クラスアドバイザー	2期	クラスアドバイザー
A クラス (18名)	教員 A (男性)	教員 A (男性)	教員 D (女性)	教員 D (女性)
B クラス (18名)	教員 A (男性)	教員 D (女性)	教員 D (女性)	教員 A (男性)
C クラス (18名)	教員 B (女性)	教員 B (女性)	教員 E (男性)	教員 E (男性)
D クラス (18名)	教員 C (男性)	教員 C (男性)	教員 F (女性)	教員 F (女性)
E クラス (18名)	教員 B (女性)	教員 E (男性)	教員 E (男性)	教員 B (女性)
F クラス (18名)	教員 C (男性)	教員 F (女性)	教員 F (女性)	教員 C (男性)

アカデミックスキルズを専任が担当すると決定していた時点で想定されたことは、二点あった。第一に、学生たちがプレゼンテーションの準備のために担当教員に相談するケースが他の授業に比べて多くなること、第二に担当

教員が実質的にクラスアドバイザーとしての役割を担うことであった。そのため、アカデミック以外の相談にも対応することが想定されたため、相談内容によってはジェンダーを考慮する必要があるだろうとの配慮から、クラスごとにジェンダーバランスを考え、半期ごとに担当教員の入れ替えをしてサポートする形式を採用した。

〈内容面〉

①1期のプレゼンテーション2回実施のうちの1回を「国際問題」「日本社会の問題」をテーマに（グループ）、もう1回を企業及び国際・地域機関に関するものとした（個人）。プレゼンテーションの対象企業・機関リストは、企業については全国及び中部圏のいわゆる優良企業を選び、それらに加え、多文化共生や国際協力に力を入れるNGOやボランティア団体をリストに追加した。また、国際・地域機関については国連関連機関や地域統合に関連した機関を選んだ。

②2期で扱う文献は、一冊の輪読ではなく世界共生学部が謳うリージョン、共生社会を意識した複数のテーマを教員サイドが用意し、学生たちはそれらのテーマごとに学術論文や書籍などを自ら探しプレゼンテーションに備える。プレゼンテーションはグループで行う形式を採用した。

③両学期ともにアクティブラーニングの要素を導入した。具体的には、グループプレゼンテーションの準備過程で、グループワーク、グループディスカッションを取り入れた。

1期では、コース全体の3分の1の時間をアカデミックスキルズの内容、情報倫理（特にコピーや剽窃の悪質性について強調）、そしてプレゼンテーション技術などについて全体講義をおこなった後に、最初のプレゼンテーションをグループで行う方式にした。早い段階で、グループ分けとグループごとのプレゼンテーションのテーマ決定を行い、学生たちには全体講義でアカデミックスキルズの作法を学びつつプレゼンテーションのための準備を併行して行えるようにした。全体講義ではあらかじめプレゼンテーションのグループに分かれて着席し、講義の一部の時間を利用し、講義内で指定したテーマにつ

いてディスカッションをしたり、プレゼンテーションのテーマを絞り込むために、KJ法を利用したグループワークを行うなどした。そして、1回目のプレゼンテーション終了時に、全体講義でセメスターの中間振り返りを実施し、1回目のプレゼンテーションで見られた良い点と課題点を整理し、かつ学生個人にも振り返りをしてもらった。そのうえで、2回目のプレゼンテーションに臨むようにした。第14週に各クラスで2回目のプレゼンテーションの優秀者1名を決定し、選ばれた学生が最終週に全員の前でプレゼンテーションを行い、教員が総括をおこなった。最終週には、個人プレゼンテーションのテーマをもとに4,000字程度のレポート提出を義務付け、最終の振り返りもしてもらった。

2期では、1期にアカデミックスキルの基本事項は学んだことを前提に、担当教員があらかじめ、世界共生学科が扱うリージョンや共生を意識したテーマをいくつか絞って授業を展開した。全体講義では、1期に学んだアカデミックスキルの基本事項を整理するとともに、2期も早い段階でプレゼンテーションのグループ分けやテーマ決めを行いつつ、グループに分かれてブレインストーミングやディスカッションを行い、テーマの絞り込みを行っていった。プレゼンテーション用に採用した大テーマは、言語、共生、環境であり、中テーマまでは教員が事前に指定する形式をとった。それとは別にプレゼンテーションを実施する前に、全体講義で宗教と境界をテーマに教員がミニレクチャーをするとともに、自分たちに関連資料をもとにディスカッションをするなどして、問題の複雑性や問いの立て方について学ぶ機会を持った。こうしたプロセスを経て、学生たちは三つのテーマから2回のプレゼンテーションを実施するという内容となった。プレゼンテーションの準備の段階で、図書館への誘導と学術書・学術論文の多読の必要性を繰り返し説いた。グループプレゼンテーション及びレポートの評価については、事前に評価項目・基準についてループリックを学生に配布し、解説しておくことで、準備段階からよいプレゼンテーション、レポートとはなにかというものの意識づけを行った。

成績の評価方法は、1期と2期で詳細は異なるものの、①プレゼンテーショ

ン、②学期末レポート提出、を義務付け、①と②については一つでも欠けた場合は成績がつかないものとした。

2-2. 初年度の振り返り

初年度の授業が終了した時点で、アカデミックスキルズ担当者による振り返りを行った。

(1) 1期担当教員の振り返り

1期では最初の5回と中間に1回の全体講義を通して、「アカデミックスキルズとは何か」「ロジカルシンキングとは何か」「クリティカルシンキングとは何か」「情報倫理・研究における倫理とは何か」「プレゼンテーション方法」「レポートの書き方」などを扱った。それぞれの授業内ではグループあるいはチームに分かれて、ロジカルシンキングやクリティカルシンキングで取り上げられた具体例について話し合いをしてそれぞれのグループの回答を発表するなど、教員によるレクチャーを補完する形で実施した。また、「論文・レポートの手引き」を全員に配布し、プレゼンテーションやレポートの参考文献、引用等の際に参照するよう指導した。

プレゼンテーションについては、グループと個人をそれぞれ一回経験できるように授業の組み立てにした。グループプレゼンテーションのテーマは、日本社会と国際社会の課題を教員サイドでいくつか用意し、学生たちが選んでプレゼンテーションを行った。個人プレゼンテーションでは、今後のキャリアを見据えて「国内外・中部圏の有力企業、国際機関、NGO」をテーマとしてリストを作成し、学生たちはその中から他者と重複しない形でプレゼンテーションを行った。

評価できる点は以下の点が挙げられた。

- 各プレゼンテーションを通して、多くの場合に個人レベルでプレゼンテーション能力に改善は見られた。
- 研究室に事前に相談に来るなど、熱心に授業準備をする学生が少なからず見られた。
- 学生たちの振り返りでもおおむねポジティブな意見が見られ、「何の

ためにやっているのか分からない」などの意見は見られなかった。

- また、2期担当の先生方が授業に参加してくださったことで、教員間の情報共有がスムーズに行うことができた。

課題として以下の点が挙げられた。

〈プレゼンテーション〉

- 個人プレゼンテーションについては、各クラスの人数が多いため、最大でも一回当たり3人が限度で、自分のプレゼンが終わるとクラスでの集中力が目立ってなくなる傾向にあった。
- 個人レベルでは、プレゼンのスタイルや情報収集など大幅に改善が見られた学生もいたものの、個人とグループでテーマが変更になったため、グループプレゼンで学んだことを「活かす」ことが十分にできなかった。
- プレゼンにせよレポートにせよ、無理やり「解決策」や「～すべき」など結論を書く傾向が見られた。

〈テーマ〉

- 企業等個人プレゼンのテーマについては、情報源そのものの多寡が大きいいため準備の条件に偏りが見られた。

(2) 2期担当教員の振り返り

2期では、1期の課題点を踏まえてグループプレゼンテーションを中心とした。授業計画を見て分かるように、テーマを絞りテーマに関するマテリアルを教員サイドが準備し、一つのテーマを複数回で分析していくスタイルを採用した。1期のプレゼンでは、無理やり結論で解決策などを提示する例が頻繁に見られたため、2期では事実を整理しどこにどんな問題があるのか「問題の所在」を明示し、それがどのような経緯で生じているのかを分析させることに注力した。そのうえで、アカデミックな分析を行うために以下のプロセスを徹底させるようにした。

文献の収集→文献の分析と事実の整理：問題の所在→問題の原因・背景の分析

プレゼンテーションの回数は、1期と変わらないものの、プレゼンを実施するチームで異なるテーマでこのプロセスを何度も繰り返すことで、アカデミックの作法を刷り込ませることを目的とした。また、扱う文献についても前期ではWebコンテンツが目立っていたが、2期では書籍ベースを基本とすることを徹底した。さらに「引用」の練習も実施した。

成績評価の一つとしてループリックやノートチェックを導入した。ノートチェックの目的は、きれいにできているかどうかではなく、自分のためのノートであり、重要な情報を残しているかどうかを確認する。成績が低い学生のノートは、上記のようなレベルにないことが分かった。

評価できる点については以下の点が挙げられた。

- 提出されたレポートからは、1期からアカデミックのスタイルに一定程度忠実な形で改善が見られた。
- 自己評価・他己評価を実施：他己評価と実際の成績評価との相関関係が一定程度見られたのが興味深い。
- 躊躇なく図書館に行き、学術書にアクセスするという態度が多く of 学生で見られた。また、インターネット経由で学術論文を探し、プレゼンテーションやレポートに活用することができるようになった。

課題としては以下の点が挙げられた。

- 着眼点が明確でなく、特に、リサーチクエストを冒頭で示さないがゆえに、レポート全体の論旨が不明確なケースが散見された。
- 他人の意見と自分の意見を区別できていない。
- 引用の仕方、特に間接引用ができていない。
- 学生独自の考察がない。
- 全体に占める引用の割合が高い、あるいは、逆に引用が皆無というケースが散見された。
- 参考文献を鵜呑みにする傾向があり、文中で引用される参考文献が偏っていた。
- 稚拙な日本語表現が目立った。

以上、世界共生学部のアカデミックスキルの当初の狙いとその内容について振り返り、担当教員による初年度の振り返りを確認してきた。学生たちによる振り返りからは、この授業の目的や目標について理解ができないなどの内容はみられず、おおむねポジティブな内容を確認することができた。また、プレゼンテーションについても、各期二回実施することで二回目に発表形式や内容に改善がみられることも確認できた点で、一定の成果があったと判断できる。他方、全体授業で伝えたことがプレゼンテーションにおいて十分に反映されていないことも分かった。特に1期のプレゼンテーションの場合、1回目はグループで「日本社会の問題」「国際社会の問題」について、2回目は個人で企業、NGO、国際機関、についておこない、レジュメの体裁、参考文献の記載方法など形式面での改善は見られたものの、内容面では1回目と2回目のプレゼンテーショントピックが大きく異なったためか、それぞれが調べた内容をそのまま羅列する、自分の意見と他者の意見の区別をしないで記述する、自分が感じたことや安易な解決案の提示に終わってしまうものが多く見られた。この傾向は、おおむね2期にも見られることが分かった。

また、1期の個人プレゼンテーションについては、2017年度1期の「アカデミックスキルズ」スケジュール（資料1参照）でも確認できるように、一回につき3名のプレゼンテーションを6週にわたって実施する形になった。国際教養学科のアカデミックスキルズがおおむね1クラス15名以内で構成されていたのに対して、本学科は1クラス18名で構成される結果としてスケジュールがややタイトになった。こうしたことが要因の一つなのか、自分の発表が終了して以降、他者のプレゼンテーションに対し集中力が欠ける態度が散見された。

学科独自のスタイルとして導入したジェンダーに配慮した教員の配置については、1期の最初に伝えていたものの、学生たちがその点を踏まえて教員に相談に来ているかどうかについては2期終了後の教員の振り返りでも確認はできなかった。

2年目以降は、以上のような点を踏まえ実践内容・方法に修正を加えることになった。

資料 1 世界共生学科 2017年度 1 期「アカデミックススキルス」スケジュール表

世界共生学科2017年度「アカデミックススキルス」スケジュール表

2017/4/11作成

日付	国	テーマ	開催形式	内容・進捗・所要時間	メモ
4月13日	1	アカデミックススキルス総論：授業の狙いとアカデミックススキルスとは／ノートテイキングの作法	全体+WS (831)	授業の狙いとアカデミックススキルスとは (70分) / ノートテイキング (P9)を用いたノートテイキングを含む)の作法 (20分)	成績評価説明、スケジュール表配布
4月20日	2	ロジカルシンキングの意義／クリティカルシンキングと情報的視点※：自分の視座を持つ	全体+WS (831)	ロジカルシンキングの意義 (45分) / クリティカルシンキングと情報的視点※：自分の視座を持つ (45分) ※身近な問題、例えばジェンダーバイアス／言葉の定義の重要性を学ぶ	
4月27日	3	プレゼンテーションとは／レジュメの作成	全体 (831)	プレゼンテーションの作法とグループプレゼンのグループ発表順書の決定及び個人プレゼンの発表順書の決定 (30分) / レジュメの作成 (45分) / レジュメの提出方法 (Moodleへのアップの方法とアップに際しての諸注意) (25分)	グループプレゼンおよび個人プレゼンのテーマを配布
5月11日	4	情報収集と情報倫理／情報・資料分析	全体+WS (831)	情報収集と情報倫理 (45分) / 情報・資料分析：統計や図表の読み解き方 (45分)	
5月18日	5	コミュニケーションとは／傾聴と関係性の構築	全体+WS (831)	コミュニケーションとは+傾聴と関係性の構築	グループプレゼンおよび個人プレゼンのテーマの決定。
5月25日	6	グループプレゼン1 (国際問題)	クラス別	グループプレゼンテーション1 (発表15分、ディスカッション) ×3グループ テーマ：「国際問題」の中から選択	
6月1日	7	グループプレゼン2 (日本の社会問題)	クラス別	グループプレゼンテーション2 (発表15分、ディスカッション) ×3グループ、教員まとめ テーマ：「日本の社会問題」の中から選択	学びの振り返り入り連絡 (Moodleを使用)
6月8日	8	レポート作成の作法／アカデミックススキルスとキャリア	全体+WS (831)	レポート作成の作法 (教員A) / アカデミックススキルスとキャリア (なぜ企業・国際機関・NGOを題材とするのか) (教員B)	論文・レポート執筆事項配布
6月15日	9	個人プレゼン (企業)	クラス別	個人プレゼンテーション 企業 (発表15分、ディスカッション、教員コメントなど) ×3人	
6月22日	10	個人プレゼン (企業)	クラス別	個人プレゼンテーション 企業 (発表15分、ディスカッション、教員コメントなど) ×3人	
6月29日	11	個人プレゼン (企業)	クラス別	個人プレゼンテーション 企業 (発表15分、ディスカッション、教員コメントなど) ×3人	
7月6日	12	個人プレゼン (企業+国際機関)	クラス別	個人プレゼンテーション 企業+国際機関 (発表15分、ディスカッション、教員コメントなど) ×3人	
7月13日	13	個人プレゼン (国際機関+NGO)	クラス別	個人プレゼンテーション 国際機関+NGO (発表15分、ディスカッション、教員コメントなど) ×3人	
7月20日	14	個人プレゼン (NGO)、クラス総括	クラス別	個人プレゼンテーション NGO (発表15分、ディスカッション、教員コメントなど) ×3人、クラス総括、代表者選出、ノートチェック、レポート提出についてのリマインド	代表者の発表12分・学びの振り返り入り連絡 (Moodleを使用)
7月27日	15	総括	全体 (831)	各クラス代表プレゼンテーション／レポート提出	

※グループプレゼン、個人プレゼン、レポート提出を必須とする
※総括など、不正行為が相対的な場合は、単位を認めない
※担当教員にプレゼンなどで相談がある場合は事前にアポイントメントを取ること

資料 2 2期授業内容

アカデミックスキルズ2期授業予定表

	授業形式	テーマ（対象国、地域）	目標
宗教	ディスカッション ①	身近な問題から宗教について考える 1 回目：各教員が宗教についての個人的体験について話す 2 回目：記事についての感想を学生同士で共有 3 回目：ディスカッション	各国で宗教に関する問題を概観し、日本での宗教的配慮がどうあるべきかについて考察する。
境界	ミニレポート & ディスカッション ②	境界を引くことの意味について考える 1 回目：島田先生・地田先生による境界についてのレクチャー 2 回目：分離独立運動の具体例を挙げる	境界とは何か？境界線を引く理由とその問題、課題について理解する。
環境問題	グループプレゼン テーション①	環境問題（中国、日本、東南アジア、アフリカ） ①「PM 2.5 について」 ②「メコン川とダム開発」 ③「砂漠化」	世界の様々な地域で起こっている環境問題とその背景について理解する。
共生	グループプレゼン テーション②	日本人と多文化共生 ①「東海地方の多文化コミュニティについて（田地問題）」 ②「アメリカ合衆国における日系コミュニティの歴史」 ③「アイヌ民族について」	日本における多文化共生での問題点を理解し、今後の社会形成への展望を描く。また過去に、移民として外国へ渡った日本人がその国でどのように生きているのかについて理解する。
言語	グループプレゼン テーション③	複数の公用語（言語政策） スベイン、カナダ、インド、セネガル、ブータン、カザフスタン	スベイン、カナダ、インド、セネガル、ブータン、カザフスタンの選抜肢から1つの国を選んで、公用語が2つ以上ある国の歴史背景、言語政策について発表する。

資料3 2期スケジュール

スケジュール

①9月21日	全体	ガイダンス 授業概要説明、ブレインストーミングワークショップ、ノートテキングとプレゼン準備の方法、グループメンバー発表
②9月28日	全体	ガイダンス レジュメの分析ワークショップ、ループリック評価についての説明、ループリックによるレジュメの評価、プレゼンテーマ決定、次の授業について
③10月5日	全体	宗教①（担当：地田、松本、近藤）
④10月12日	クラス	宗教②
⑤10月19日	クラス	宗教③
⑥10月26日	全体	境界①（担当：島田、地田）
⑦11月2日	クラス	境界②
⑧11月9日	クラス	2グループの発表（時間配分：発表15～20分、質疑応答15分、教員コメント10分）
⑨11月16日	クラス	2グループの発表（時間配分：発表15～20分、質疑応答15分、教員コメント10分）
⑩11月30日	クラス	2グループの発表（時間配分：発表15～20分、質疑応答15分、教員コメント10分）
⑪12月7日	全体	ガイダンス レポート作成の手順について
⑫12月14日	クラス	2グループの発表（時間配分：発表15～20分、質疑応答15分、教員コメント10分）
⑬12月21日	クラス	2グループの発表（時間配分：発表15～20分、質疑応答15分、教員コメント10分）
⑭1月11日	クラス	2グループの発表（時間配分：発表15～20分、質疑応答15分、教員コメント10分）
⑮1月18日	全体	各クラス代表の発表会

プレゼンの順番

	松本	地田	近藤
プレゼン①	環境問題	共生	言語
プレゼン②	言語	環境問題	共生
プレゼン③	共生	言語	環境問題

3. 実践内容・方法の修正とコロナ禍での対応

本セクションでは、2年目以降の実践内容・方法の修正点とコロナ禍での対応について整理し、現在の課題を明らかにする。

3-1. 2年目以降の実践内容・方法の修正

(1) 1期の授業内容・方法の修正

1期の授業内容・方法については、初年度から大きく変わるようになった。特に大きな変更は、1回目のプレゼンテーションのテーマとしていた企業・NGO・国際機関をやめたことにある。この点は、担当教員間で議論を重ね、大きく二つの観点から取りやめを決定した。一つは同じテーマを二回プレゼンテーションするほうが、一回きりで終わるよりも必要なスキルについての学生たちの理解度が向上するのではとのことである。もう一つは、リストアップした企業・NGO・国際機関によって、得られる情報に大きな差がありすぎるというものだった。

そこで、新たな方針として前年度の課題を踏まえ、以下の点を強調することになった。

- 同じテーマを2回プレゼンテーションすることによって改善が必要な点を確実に理解し、じっくりと取り組む大切さを実感してもらう。
- 「事実」の正確な整理を優先する。
- 安易な解決案の提示を控えるようにする。
- 文献の質的量的充足をはかる。

この方針をしっかりと実施するために、前年度から変更した点は以下の通りである。

- グループプレゼンテーションと個人プレゼンテーションの併用からグループプレゼンテーションのみとする。
- グループプレゼンテーションの準備のため、グループでの意見交換や準備のための時間を設ける。
- プレゼンテーションに際して「事実」を正確に整理する。
- 参考文献に、書籍ベースの文献を3冊以上含むようにする。

また、教員によるプレゼンテーションの評価についても、教員間でばらつきを減らすため、プレゼンテーションの評価シートを作成し用いるようにした（参照、資料4）。レポートについても、学生自身が提出に際してレポート評価基準に照らし、自分のレポートがそれぞれの評価基準を満たしているかどうかを自己採点したものをレポートに貼りつけて提出するようにした（参照、資料5）。

資料4 グループプレゼンテーション評価基準

世界共生学科 Academic Skills I 2021 年 月 日

〈グループプレゼンテーション評価基準〉

プレゼン形式		プレゼン内容			質問者と質問内容	
◆全体◆ 〈レジュメ〉 □タイトルは適切か(内容とマッチ、明確、絞られている) □記載した情報量は適切か □全体の流れに論理性・一貫性があるか □「はじめに」と「おわりに」の内容が一致しているか：首尾一貫した内容になっているか □結論部が単なる感想や憶測になっていないか □引用はなされているか □参考文献の書式は指定とおりか □参考文献の文献は学術的なものが含まれているか（ネット情報ばかり、信頼性に欠ける） □図表に出典情報を記載しているか □図表は大きすぎ、小さすぎないか □誤字・脱字の有無 □必要な情報は記載されているか（日付、学籍番号、名前、タイトル、ページ） □所定枚数を超えていないか □レジュメは見やすいか	0	1	□発表目的は明確か （知ってもらうX、明らかにすることを明記） □各発表者間の内容の整合性はとれているか □話している内容に根拠は伴っているか □専門用語など聴き手に分からない用語の説明がなされているか □図表の読み方・解説は適切か 〈時間〉 □発表時間は守られていたか（最低 15 分以上）	1	2	3
	0	1	1	2	3	
	0	1	1	2	3	
	0	1	1	2	3	
	0	1	1	2	3	
	0	1	1	2	3	
	0	1	0	1		
	0	1				
	0	1				
	0	1				
	0	1				
	0	1				
	0	1				
	0	1				
	0	1				
	0	1				
	氏名			〈備考〉		
□声の大きさは十分か			1	2	3	
□話す速度は適切か			1	2	3	
□話すときに聴衆に顔を向けているか （レジュメや読み原稿ばかりみていないか）			1	2	3	
□質問に答えているか（人任せにしていないか）			1	2	3	

氏名 <input type="checkbox"/> 声の大きさは十分か <input type="checkbox"/> 話す速度は適切か <input type="checkbox"/> 話すときに聴衆に顔を向けているか (レジュメや読み原稿ばかりみていないか) <input type="checkbox"/> 質問に答えているか (人任せにしていないか)	1	2	3	〈備考〉
	1	2	3	
	1	2	3	
	1	2	3	
	1	2	3	
氏名 <input type="checkbox"/> 声の大きさは十分か <input type="checkbox"/> 話す速度は適切か <input type="checkbox"/> 話すときに聴衆に顔を向けているか (レジュメや読み原稿ばかりみていないか) <input type="checkbox"/> 質問に答えているか (人任せにしていないか)	1	2	3	〈備考〉
	1	2	3	
	1	2	3	
	1	2	3	
	1	2	3	
氏名 <input type="checkbox"/> 声の大きさは十分か <input type="checkbox"/> 話す速度は適切か <input type="checkbox"/> 話すときに聴衆に顔を向けているか (レジュメや読み原稿ばかりみていないか) <input type="checkbox"/> 質問に答えているか (人任せにしていないか)	1	2	3	〈備考〉
	1	2	3	
	1	2	3	
	1	2	3	
	1	2	3	

資料5 レポート評価基準

世界共生学部アカデミックスキーズ

レポート評価基準

必要な情報は指定されたとおりに記載されているか (日付、学籍番号、名前、タイトル、ページ)		／	1
参考文献の書式は指定されたとおりか		／	1
参考文献は適切か(書籍が三冊含まれているかを含む)		／	1
誤字・脱字の有無(である調を含む)		／	1
専門用語などの説明・定義がなされているか		／	1
引用・出典は適切か		／	2
タイトルは適切か		／	2
文章の適切さ(主語・述語等)		／	2
レポートの目的は明確か		／	3
章と章の関連性は明確か		／	3
主張に根拠は伴っているか		／	5
オリジナリティはあるか		／	3
「はじめに」と「おわりに」の内容が一致しているか: 首尾一貫した内容になっているか		／	3
結論部が単なる感想で終わっていないか		／	2
レポートを提出した	10	／	10
合計	0	／	40

(2) 2期の授業内容・方法の修正

2期の授業内容・方法については、初年度に明らかになった課題点の改善を目標に、次のような授業展開を目指すこととした（参照、資料6）。成績評価については、前年度に引き続きルーブリック（参照、資料7及び資料8）を採用し、前年度の反省点を踏まえつつ、評価項目・基準の見直しを行った。

- 「スキル」に関する講義・ワークショップの実施

プレゼンテーション及びレポートの構造や、引用・参考文献の書き方に重点を置いて、ワークショップを通じてしつこく繰り返して身につけさせるようにした。特に、コピー・アンド・ペースト（以下、コピペ）がなぜいけないのか、どのような場合がコピペと判断されるのかということを繰り返し説明することで、剽窃への対策とした。

- ディスカッション（宗教・境界）

プレゼンテーション前に、宗教と境界を大テーマに、グループディスカッションを実施した。グループワークを通して、実際に議論するディスカッションテーマを学生たちに決めさせ、日本での宗教事情に関連する新聞記事や、世界の境界問題に関するやや難解な内容のテキストに親しんでもらうという工夫を行った。これは、グループプレゼンテーションの準備作業の予行演習となった。

- グループプレゼンテーション

大テーマについてはくじ引きで、中テーマについてはグループで話し合って選択し、小テーマについてはグループごとに「読み、調べ、考える」を通して決定するプロセスを採用した。中テーマについては、プレゼンテーションは同じテーマで2回実施させ、1回目のプレゼンテーションで学生から出された質問や、教員から指摘された問題点を、2回目のプレゼンテーションで反映させるというプロセスをとった。

- レポート執筆（個人）

レポートでの日本語表現について、学生が多用しがちなアカデミックなレポートに相応しくない表現の文章を訂正させるというワークショップを行うことで改善を図った。また、レポート全体の構造、特

資料6 2018年度2期スケジュール

スケジュール

① 9月20日	全体	ガイダンス 授業概要説明(10min)、プレゼン準備の方法(おさらい)(10min)、レジュメ作成の留意点(引用の仕方、発表構成、参考文献の書き方)(30min)、ノートテレーキングの方法(引用するために、読んだページをメモする)(15min)、ループリック評価についての説明(15min)、グループメンバー発表エッジ引きで大テーマ決定(10min)
② 9月27日	全体	ガイダンス プレゼン小テーマ決定(10min)、プレゼンストーリーミング(15min)、レファレンス+ワークショップ(45min)、次の授業について(15min)
③ 10月4日	クラス	宗教①(新聞の要約+プレゼンストーリーミング+ディスカッションテーマ決定)
④ 10月11日	クラス	宗教②(グループディスカッション)
⑤ 10月18日	全体	境界①(担当:島田、地田)
⑥ 10月25日	クラス	境界②(資料の要約)
⑦ 11月1日	クラス	2グループの発表(時間配分:発表15~20分、質疑応答15分、教員コメント10分)
⑧ 11月8日	クラス	2グループの発表(時間配分:発表15~20分、質疑応答15分、教員コメント10分)
⑨ 11月15日	クラス	2グループの発表(時間配分:発表15~20分、質疑応答15分、教員コメント10分)
⑩ 11月22日	全体	ガイダンス レポート作成の手順について
⑪ 11月29日	クラス	2グループの発表(時間配分:発表15~20分、質疑応答15分、教員コメント10分)
⑫ 12月6日	クラス	2グループの発表(時間配分:発表15~20分、質疑応答15分、教員コメント10分)
⑬ 12月13日	クラス	2グループの発表(時間配分:発表15~20分、質疑応答15分、教員コメント10分)
⑭ 12月20日	全体	レポート提出前の注意点:レポートループリックの再確認、着眼点と結論の確認(シート作成)、「はじめに」と「おわりに」の書き方 → レポートの提出は14回目の授業が終わってから受け付け開始
⑮ 1月10日	全体	各クラス代表の発表会

プレゼンの順番

	松本	地田	近藤
プレゼン①	環境問題	共生	言語
プレゼン②	言語	環境問題	共生
プレゼン③	共生	言語	環境問題

資料7 2期ルーブリック（グループプレゼンテーション用）

クラスメンバー：		テーマ：		質問者／質問内容：
内容				評点
着眼点	□着眼点の選択、その動機に十分な説得力が見られ、それが「導入（はじめに）」で明確に示されていた。	□着眼点について「導入（はじめに）」で明確に示されているが、その選択の動機がやや曖昧で疑問が残った。	□着眼点が「導入（はじめに）」で示されていないか、あるいは、その選択の動機が全く説得的でなく無理があった。	10
発表構成と論理性	□発表全体が「導入（はじめに）」で示された着眼点や問いに沿ったものであり、「本論」での叙述や「結論（おわりに）」での考察・分析に至るまで論理的な一貫性があった。 □問いや結論が「すべき」論になっていない。	□発表は全体として「導入（はじめに）」で示された着眼点や問いについて意識されているが、それらと「本論」での叙述や「結論（おわりに）」での考察・分析との間の論理的な整合性にやや難点があった。 □問いや結論が「すべき」論になってしまっている。	□発表は全体として論理的にバラバラであり、本論での叙述内容に論理的な必然が感じられず、「導入（はじめに）」と「結論（おわりに）」とが完全に乖離している。 □問いと結論云々以前に全体として伝えようとしていることが意味不明である。	10
フアクト	□論じられている事実や事例は概ね詳細かつ正確だった。 □取り上げられている事例は総じて適切なものであった。	□論じられている事実や事例に詳細さを欠いていたり、不正確なものが見受けられたりした。 □取り上げられている事例に適切でないものが含まれていた。	□論じられている事実や事例は総じて詳細でなく、総じて不正確であった。 □総じて不適切な事例が取り上げられていた。	10
文献	□適切なソースのみから引用がされている。あるいは、適切さという点で疑義があるソースを引用しているがなるべく批判的な検討が行われている。 □ウェブ媒体以外にも書籍・学術論文から3点以上の参考文献が挙げられている。	□適切さという点で疑義があるソースを批判的検討なく用いている。 □ウェブ媒体以外の書籍・学術論文から2点以下の参考文献しか挙げていない。	□適切さという点で疑義があるソースを批判的検討なく用いており、それが議論の根拠を成してしまっている。 □ウェブ媒体しか参考文献として挙げていない。	7
多角的視点	□発表者が準備段階から多角的な視点を持ってテーマを吟味したことがうかがえた。	□発表者が準備段階から多角的な視点を持つとうとした努力が少なくともうかがえるが、それがうまく発表内容に反映されていない。	□発表者が準備段階から多角的な視点を持つとうとした努力の形跡がない。	5
		小計		42
レジュメ				
構造	□レジュメは、「導入」「結論」と3～4つの節で構成されている。 □各節の分量のバランスがよい。 □レジュメには、各節の内容が分かりやすく盛り込まれている。 □節ごとの相互の関連性について考慮されていることがレジュメを一読して分かる。	□レジュメの構成について、「導入」「結論」はあるが、それ以外の節の数が多すぎ（少なすぎ）。 □節ごとの分量（内容の濃淡）にばらつきがある。 □レジュメの内容の分かりやすさが節によってばらつきがある。 □節ごとの相互の関連性について意識はされているが、レジュメを一読しただけではよく分からない箇所がある。	□レジュメの構成について、「導入」「結論」に相当する部分を欠いており、節の数についても多少が見られる。 □節ごとの分量（内容の濃淡）に目で分かるほどのかなりのばらつきがある。 □レジュメにある各節の内容が全体的に把握しづらい。 □節ごとの相互の関連づけがほとんどと成されていない。あるいは、内容を整合性が取れていない。	16
分量	□レジュメ本文の分量が図表等を含めて2ページ（多くとも3ページ）に収まっている。	□レジュメ本文の分量が制限枚数を大幅にオーバーしてしまっている（4ページ以上）。	□レジュメ本文の分量が2ページに満たない。あるいは、図表を含めて2ページを満たしたとしても分量が明らかに過剰である。	5
見やすさ	□レジュメは見やすく構成されている。 □レジュメは、文章だけでなく、図表を活用するなど視覚に訴える情報を含んでいる。	□レジュメを見やすくする工夫がされているとは言い難いが、問題なくレジュメを読むことはできる。 □レジュメは、文章だけでなく、図表など視覚に訴える情報も活用されているが、見やすさの点で工夫の余地がある。	□レジュメを見やすくする工夫がなされておらず、読みにくい。 □レジュメは文章のみで構成されているか、図表が活用されていても図表そのものが見にくい。	6
引用	□指示された形式で適切な参考文献の引用がなされている。	□指示された形式での参考文献の引用を行うよう努めているが、適切さに欠ける箇所が見られる。	□参考文献の引用について指示された形式を無視しており、適切さを欠いている。	7
		小計		34
発表技量				
グループ	□各メンバーには発表時間や発表内容が均等に割り当てられており、グループのメンバーが等しく活躍する機会があった。 □各メンバーの発表がつながっており、トピックに関する論理的な議論を深めるものであった。 □グループのメンバーが授業外で十分に協働しながらトピックについて議論を行ったことがうかがえた。 □グループの報告はほぼ指定された時間どおりに終わった。	□各メンバーに割り振られた発表時間や発表内容に若干の偏りが見られた。 □各メンバーの発表のつながりは意識されていたが、明確には示れておらず、トピックに関する論理的な議論を深めるまでには至らなかった。あるいは、他の理由で全体的な発表の方向性がやや失われることがあった。 □グループのメンバーが授業外で協働しながらトピックについて議論を行ったことがそれなりにうかがえた。 □グループの報告は指定時間を若干オーバーする、あるいは、やや早めに終わってしまった。	□各メンバーに割り振られた発表時間や発表内容に著しい偏りがあり、特定のメンバーに役割が集中していた。 □各メンバーの発表のつながりが方についてほとんど意識されておらず、全体として各メンバーがバラバラの報告をしていた。 □グループのメンバーが授業外で協働しながらトピックについて議論を行ったことが発表からほとんどうかがえなかった。 □グループの報告は指定時間を大幅にオーバーする、あるいは、だいぶ早めに終わってしまった。	16
個人	□容易に理解できるスピードではっきりと話し、声量も大きく、楽に聞き取ることができる。	□話が速すぎるか、声量が小さく、容易に報告内容を聞き取ることができない。	□口ごもった話し方をし、話すスピードが速すぎるか、声が短促に小さく、報告内容の理解が困難である。	4
質疑応答	□発表の主旨に沿った質問に対して、論点をずらすことなく、よどみなく的確な回答がなされていた。	□発表の主旨に沿った質問がなされたにもかかわらず、論点のずれた回答や不的確な回答がなされることがあった。	□発表の主旨に沿った質問がなされたにもかかわらず、論点のずれた回答や不的確な回答しかできなかった。	4
		小計		24
		合計		100
		成績		25

備考／全体コメント

メンバー別配点：

資料8 2期ルーブリック（レポート用）

世界共生学科アカデミックスキズ2期 期末レポート ルーブリック

学籍番号：

氏名：

大テーマ：

	A	B	C	D	満点	評点
着眼点	□グループプレゼンのテーマと内容を踏まえた上で、学生独自の着眼点がレポートに反映されており、その選択と動機に説得力がある。10	□グループプレゼンのテーマと内容を踏まえており、着眼点についても明記されているが、その選択の動機がやや曖昧で疑問が残るものである。5	□グループプレゼンのテーマには合致しているが、レポート執筆の着眼点が明記されていない、あるいは、不明である。2.5	□グループプレゼンのテーマと内容をほとんど踏まえておらず、レポート執筆の着眼点についても明記されていない。0	10	
構成	□レポートのタイトルが扱われているテーマ・内容を的確に表現している。3	□レポートのタイトルから扱われているテーマは分かるが、その内容の想像がつかない。2	□レポートのタイトルが扱われている内容とずれている。1	□レポートのタイトルが明記されていない、あるいは、意味不明である。0	3	
	□冒頭で何を調べ、明らかにするのかということ、レポート全体で明らかにする問いが明確に記されている。7	□冒頭で何を調べ、明らかにするのかということを示されているが、問いの形になっていない。5	□冒頭で、何を調べ、明らかにするのかということを示そうとはしているが、明確には分らない。2.5	□冒頭で、何を調べ、明らかにするということがまったく示されていない。0	7	
	□調べたことに対する結論や問いに対する答えが明記されている。10	□結論に相当する部分はあるが、冒頭部分と結論とが若干ずれている。5	□結論に相当する部分はあるが、冒頭部分と結論とが全く結びついていない。2.5	□結論に相当する部分を欠いている。0	10	
	□序論・結論とレポート中盤の内容は結びついており、調べた内容についても十分に記されている。10	□序論・結論とレポート中盤の内容は結びついてはいるが、調べた内容について十分に記されているとは言えない。5	□序論・結論とレポート中盤の内容の結びつきが悪く、調べた内容も十分に記されているとは言えない。2.5	□レポートの内容が自分で調べたことよりも個人的な臆測に過ぎない部分が多い。0	10	
内容	□正しい情報（ファクト、史実）に基づいてレポートでの議論が展開されている。10	□書かれている情報（ファクト、史実）に若干の誤りが見受けられる。5	□書かれている情報（ファクト、史実）に誤りが多い。2.5	□ファクトに基づかず、臆測だけで議論が展開されている。0	10	
	□執筆者が独自に調べたことに対して、根拠がある自分なりの深い考察・分析がある。10	□執筆者が独自に調べたことに対して、根拠に基づいた自分なりの考察・分析はあるが、深い分析とは言えない。5	□執筆者が独自に調べたことに対して、自分なりの考察・分析を試みているが、その根拠が薄弱である。2.5	□執筆者が独自に調べたことに対して、自分なりの考察・分析を全くしていない。0	10	
	□レポートには、その主題に関連する複数の見方・見解が反映されており、多角的視点をもっていることが分かる。10	□執筆者が多角的な視点を持とうとした様子は文面から伺えるが、それがレポートの内容にうまく反映できていない。5	□レポートには偏った見解のみを参照しており、多角的視点を持とうとした形跡が伺えない。2.5	□レポートの内容にそもそも一貫性がなく、多角的視点の確保以前に内容がよく分からない。0	10	
文体	□ガイダンスや「手引き」の内容を踏まえつつ、レポートに相応しい文体で書かれており、分かりやすい日本語で書かれている。5	□ガイダンスや「手引き」の内容を踏まえようという努力は伺え、日本語も理解できるが、一部、レポートには相応しくない文体が用いられており、改善の余地がある。2.5	□日本語は理解ができるが、全体としてレポートに相応しくない文体が用いられており、改善せねばならない。1.25	□文体以前に、日本語として理解不能な文章が多すぎる。0	5	
分量	□レポート本文が4,000字を超えており、指定された書式を守っている。5	□レポート本文が4,000字を超えているが、指定された書式を守っていない。2.5	□レポート本文が3,500字以上4,000字未満である。1.25	□レポート本文が3,500字を下回っている。0	5	
引用	□ガイダンスと「手引き」の内容を踏まえつつ、適切な形式で引用・出典情報に記載されている。10	□ガイダンスと「手引き」の内容を踏まえつつ、引用・出典情報について文中に記載があるが、適切さを欠く部分がある。5	□ガイダンスと「手引き」の内容を踏まえた形跡に乏しく、引用・出典情報について文中に記載があるが、極めて適切さを欠いている。2.5	□ガイダンスと「手引き」の内容をほぼ無視しており、どのような文献を引用・参照したのか文章からはよく分からない、あるいは、明らかなコピペがある。0	10	
文献	□ガイダンスや「手引き」の内容を踏まえつつ、参考文献について適切な形式で記載されている。5	□ガイダンスや「手引き」の内容を踏まえようという努力は伺え、参考文献について記載があるが、一部形式が適切でないところがある。2.5	□ガイダンスや「手引き」の内容を踏まえた形跡に乏しく、参考文献の記載はあっても、その形式が適切でないところがある。1.25	□ガイダンスや「手引き」を完全に無視している、あるいは、全く参考文献の記載がない。0	5	
	□信頼できる情報源として認められる書籍・論文が3点以上参考文献として挙げられており、本文中で引用されている。5	□書籍・論文が3点以上参考文献として挙げられており、本文中で引用されているが、信頼性の面で疑問のあるものが含まれている。2.5	□書籍・論文は2点以下しか参考文献として挙げられていない、あるいは、3点以上挙げられているが、2点以下しか本文中で引用されていない。1.25	□書籍・論文が参考文献として用いられていない、あるいは、全く参考文献の記載がない。0	5	
基礎点					0	
点数					100	
評点					30	

に、「はじめに」での着眼点やリサーチクエスションの示し方について、ワークショップ形式で身につけさせるということを新たに盛り込んだ。

3-2. コロナ禍での対応

2020年度は、コロナ禍でオンライン中心に授業を展開するため、1期・2期ともに授業スケジュールや授業内容について大幅な変更を余儀なくされた。特に、1期についてはコロナ禍で迎えた初のセメスターでありかつ全面オンラインとなったこともあり、担当教員がオンライン用のツールを理解し使えるようになるための負担も大きかった。こうしたことを踏まえ、1期と2期それぞれの大学の方針と準備した授業内容とスケジュールについて整理する。

(1) 1期の対応

4月7日に政府は東京をはじめとして7都府県に緊急事態宣言を発令し、大学が所在する愛知県は4月10日に独自に緊急事態宣言を出した。それに先だって本学は、授業開始日を通常よりも2週間あまり遅らせて開始することを通知していたものの、県の緊急事態宣言発出により1期を原則的にオンラインで実施することを決定した。そのため、1期の授業は全体として13週で準備することになった。こうした状況でとりかかったのは、①1期のうちに、2期のアカデミックスキルズでの学びに必要なものは何かを決定すること、②対面を前提としたプログラムの変更、③プレゼンテーション方法の変更、④学生とのコミュニケーションをどうするか、を決定することであった。

①については、通常であれば全体講義で提供していた内容のうち、「大学での学びとは何か」「アカデミックスキルズとは何か」「情報リテラシーと研究倫理」「ノートテイキングの仕方」「タイムマネジメント」「成績評価基準」「メールの書き方」「クリティカルシンキングと複眼的視点」について、オンデマンドで動画を作成・配信することにした。タイムマネジメントは、従来も学生にとって大きな課題であるとの認識ではあったものの、アカデミックスキルズの授業内では取り上げてこなかった。しかし、コロナ禍ですべて家から受講することを想定し、少しでも時間を上手に活用してほしいことから

内容を追加した。

②について、従来「ロジカルシンキングとは」や「クリティカルシンキングとは」については、その内容を学生たちが具体的に考えられるように、グループプレゼンのメンバーと一緒に全体講義内でワークショップやディスカッションを実施してきた。そのため、オンライン上で学生間の意見交換などをいかに確保するかが課題となった。しかし、オンライン授業をはじめ当初、担当教員側のオンラインツールに対するスキル不足もあり、学生をオンライン上でグループに分けて議論をさせる形式を断念することになり、2020年1期については「クリティカルシンキング」についてのみオンデマンドで動画を配信することにした。

③のプレゼンテーション方法については、グループプレゼンテーションから、全面的に個人プレゼンテーションへ変更することにした。この時点では、教員も学生もオンラインツールに慣れていないこともあり、スムーズなコミュニケーションが難しいと判断したためである。結果、従来のグループプレゼンテーションで確保していた20分の発表時間ではなく、1人7分ととても短いものになった。そのため、プレゼンテーションの内容についても、1回目については選択したテーマについて収集した文献を正確に理解し要約したものを発表することにした。2回目は、第7回のクリティカルシンキングの動画を視聴した上で、1回目のプレゼンテーションの内容から一歩踏み込んだ内容をプレゼンテーションを準備してもらった。

④については、学生と教員、そして学生同士のコミュニケーションが十分にできないことが予想されたため、基本的にオンラインリアルタイムで授業に参加してもらい、出欠席の確認を兼ねながら学生一人ひとりの様子を確認するようにした。また、プレゼンテーションの準備はもちろんのこと第11回には学期末に提出するレポート準備のために、個別にオンラインで相談にのるなどの対応もおこなうようにした。

上述のように、1期は初の全面的なオンラインであったため、特に教員と学生、そして学生同士のコミュニケーションを中心に大きな制約があった。授業途中で実施した振り返りには、ずっとオンラインで受講しているため精神

的に辛い思いを吐露する学生も見られたものの、プレゼンテーションではどのクラスでも積極的に質問する学生が多く見られたのが印象的であった。なお、質問については事前にClassroomに掲載された発表レジュメを基に3つ考え提出する方式を採ってきた。質問の「質」に言及し褒める中で、質問をすること自体の重要さを理解したという学生の声も聞かれるようになった。また、オンライン授業で気づかされた利点もあった。座学的な授業内容は、オンデマンドでも一定の理解が得られるということだ。オンデマンド授業後のコメントシートを確認すると、授業の意図を十分に理解した上での感想が多く見られた。

なお、1期に一度だけ設けられた登校日には、新入生が登校を許されたが、本学部ではアカデミックスキルのクラスごとに分かれ、上級生や教員との交流の機会をもった。同じ様な機会のあった他学科の新入生の出席率が伸び悩んだなか、大変ありがたいことに、ほとんどの学生が出席をしたことには驚かされた。

(2) 2期の対応

2期の学事暦については、1期と異なり15週とはなったものの、新型コロナの影響が続くと予想されたこともあり、基本的にオンライン方式での実施となった。他方、対面方式の授業により得られる授業効果なども考慮し、Creative Weekを3週設定し、大学への登校を認める措置を導入した。本学科の登校日は、3週とも木曜日に割り当てられた。その三日間については、可能な限り一年生の登校日を確保し、学生間交流も兼ねてアカデミックスキルの準備やディスカッションの時間などに割り当てることとした（参照、資料10）。

2期についてはCreative Weekが3週間あるため、実質12週で授業を組み立てることになった。そのため、これまでプレゼンテーションまでに宗教と境界をテーマにして実施していた対面でのグループワークやディスカッションなどを割愛し、その代わりにプレゼンテーションに向けたオンラインでのグループワークのための時間を多く設定することにした。また、基本的にオン

資料9 2020年度1期スケジュール

世界共生学科 2020 年度「アカデミックスキルス」スケジュール表

日付	回	テーマ	開講形式	内容・担当・所要時間	メモ
4月30日	1	導入（授業目的、成績、メール）	講義	授業の狙いとアカデミックスキルスとは（窓川）/成績評価基準・メールの書き方（尾部）タイムマネジメント（NEW）	目標シート？週間スケジュール作成 知へのステップ 8、9頁（小テスト）
5月7日	2	ノートテイキングの作法	講義	ノートテイキング（PCを用いたノートテイキングを含む）の作法（カンデル）	授業のノートを取って、次の学籍番号の人に送る
5月14日	3	情報収集と情報整理	講義	情報収集の仕方と情報整理を考える	内容精査 知へのステップ
5月21日	4	文章の正確な理解と要約（1）	個別	個人発表（1）6名 ※該当文献『知へのステップ』第3章・『知へのステップ』第4章	
5月28日	5	文章の正確な理解と要約（2）	個別	個人発表（2）6名 ※該当文献『知へのステップ』第3章・『知へのステップ』第4章	
6月4日	6	文章の正確な理解と要約（3）	個別	個人発表（3）6名 ※該当文献『知へのステップ』第3章・『知へのステップ』第4章 要約課題の提出	課題指示⇒月提出⇒水曜総例、課題集約⇒本解説・課題指示
6月11日	7	クリティカルシンキング：権限的視点をもつとは？	講義	クリティカルシンキングと権限的視点	
6月18日	8	レポート準備・テーマの設定（1）	個別	個人発表（1）6名 ※該当文献『知へのステップ』第8章・『知へのステップ』第9章	レポート作成の手引き配布
6月25日	9	レポート準備・テーマの設定（2）	個別	個人発表（1）6名 ※該当文献『知へのステップ』第8章・『知へのステップ』第9章	
7月2日	10	レポート準備・テーマの設定（3）	個別	個人発表（1）6名 ※該当文献『知へのステップ』第8章・『知へのステップ』第9章 KJ法を用いたテーマの絞り方	
7月9日	11	質問日	個別	8〜10回を踏まえたQ&Aの日です。	
7月16日	12	プレゼンテーションとは	個別	プレゼンテーションの中心は後期のアカデミックですが、この回ではみなさんがイメージしやすいように、教員がプレゼンテーションを実施します。 ※該当文献『知へのステップ』第11章	代表プレゼンテーションのプレゼンターの決定
7月23日	13	総例と関係性の構築：聴き手の作法（傾聴力と発問力を使う）	全体	代表プレゼンテーションレポート提出	

※レポート提出を必須とする
※授業時間外に行われる授業は、単位を認めない
※担当教員に相談がある場合は事前にアポイントメントを取ること

◆ねらい◆
□ 意の定義・意味をつかりと考えるようにする。おしやべり≠議論/怒罪≠意見（未感を得る）
□ 「好き嫌い」の判断からの脱却
◆ 聴き手の作法を学ばせる◆
◆【傾聴力】事前に提出されたレジュメに目を通すなど、報告に関心を待つことで内容が聴くことができるか。
【発問力】事前にレジュメに目を通すなど、プレゼンに関する適切な質問をすることができているか。

資料9 2020年度1期スケジュール(つづき)

検討事項

- ☐ 冒頭(＋終わりのみMeet(3限、4限 各約50名)?出席確認の方法?
- ☐ 基本、音声入りPPTとして、ノートを取らせ、ノートを成績評価対象とする?(評価基準、建設的なノートを提示) 6回目と12回目にノート提出
- ☐ ノートブックの提出は難しいため、WORD等でも良いが、OneNoteを使用させてはどうか。「共有」で確認可能?教員の時間、要検討
- ☐ 要点のまとめ方は読むためのスキルの回で
- ☐ ワークや課題を設定。教員がチェックするのではなく、ピアレビューのような形が取れないか。学生同士は知り合いではないとの前提で、メールなどを使用し、学籍番号が次の人にメール
- ☐ Moodleのフォーラムを利用し、個人的な質問以外の質問はそこで行う。これにより、同じような質問が教員にいくつも届くことを回避するほか、より多くの学生のニーズに一元で対応

- ☐ 成績評価

ラインでの受講となるため、グループワークを円滑に共有するため大学全体で採用しているプラットフォームである Google Classroom を活用し、グループで調べたことをノートとして共有し、教員も閲覧可能にした。これにより、グループプレゼンテーションに向けた準備状況、参考文献リストの作成状況や、自分たちが独自に調べたこと、プレゼンテーションのためのレジュメ作成など、学生同士が進捗を確認できるようになった。他方で、学生個人のノートチェックはオンライン授業という状況下では困難なため、成績評価からは外すこととした。

2期の授業方針として、従来から「習うより慣れよ」方式を採用し、読む力と習慣を身につけてもらうため、2期の早い段階で参考文献リストを作成させ、コロナ禍でもこれまでどおり多読を奨励した。

また、上記のとおり、2期では以前からルーブリックでグループプレゼンテーションとレポートの評価項目・基準を事前に学生に説明しており、自分たちの作業とプレゼンテーションなどがどのように評価されるかを認識できるようにしている。コロナ禍でも同様に実施し、意識的に作業をおこなえるようにした。

資料 10 2020年度2期スケジュール

スケジュール

① 9月17日	全体	ガイダンス (全体) 授業概要説明、オンラインでのプレゼン準備の注意、プレゼン準備の方法 (おさらい)、レジュメ作成の留意点、ノートテータキングの方法 (Google Document) の編集の仕方) Classroom: グループメンバー発表 ⇒ プレークアウトセッションで自己紹介・大テーマについて相談	
② 9月24日	全体 ⇒ クラス毎	ガイダンス(全体): レブアレックスとワークセッション クラス毎: プレゼン大・小テーマの決定 参考文献リストについてのフィードバック ルーブリック評価についての説明 □ 発表準備のためのディスカッション開始 ⇒ プレインストレーミング □ 発表準備のためのディスカッション (対面式で行う。各クラスで教室に分かれる。) 発表内容のアウトラインを作成⇒ミニプレゼン (5分程度) □ 発表準備のためのディスカッション レジュメの作成	宿題 参考文献リストの作成 調査の開始
③ 10月1日	クラス毎		
10月8日 (OM) 1年生 OM 午後	クラス毎 (対面)	□ 発表準備のためのディスカッション (対面式で行う。各クラスで教室に分かれる。) 発表内容のアウトラインを作成⇒ミニプレゼン (5分程度)	
④ 10月15日	クラス毎	□ 発表準備のためのディスカッション レジュメの作成	
⑤ 10月22日	クラス毎	①-1: グループの発表 (時間配分: 発表 15~20 分、質疑応答 15 分、教員コメント 10 分)	
⑥ 10月29日	クラス毎	①-2: グループの発表 (時間配分: 発表 15~20 分、質疑応答 15 分、教員コメント 10 分)	
11月5日 (OM) 面談	面談	□発表準備のためのディスカッション (予約フォームを作成して、オフィスアワーを教員側は確保する) ☆担当教員との面談 (30分×12グループ)	
⑦ 11月12日	クラス毎	①-3: グループの発表 (時間配分: 発表 15~20 分、質疑応答 15 分、教員コメント 10 分)	
⑧ 11月19日	クラス毎	②-1: グループの発表 (時間配分: 発表 15~20 分、質疑応答 15 分、教員コメント 10 分)	
⑨ 11月26日	クラス毎	②-2: グループの発表 (時間配分: 発表 15~20 分、質疑応答 15 分、教員コメント 10 分)	
12月3日 (OM)	全体 (対面)	ガイダンス: レポート作成の手順について	
⑩ 12月10日	クラス毎	②-3: グループの発表 (時間配分: 発表 15~20 分、質疑応答 15 分、教員コメント 10 分)	
⑪ 12月17日	クラス毎	レポート提出前の注意点: レポートルーブリックの再確認、着眼点と結論の確認 (シート作成)、「はじめに」と「おわりに」の書き方 → レポートの提出は 14 回目の授業が終わってから受け付け開始	
⑫ 1月7日	全体	各クラス代表の発表会	

資料 11 2020年度2期授業内容

2020年度アカデミックスキルス2期授業予定表

		テーマ（対象国、地域）	目標
環境問題	グループプレゼン テーション①	環境問題（ユラシア・北極圏・アフリカ） ① 「アラル海の縮小」 ② 「沙漠化」 ③ 「北極圏の環境」	世界の諸地域で起きている環境問題とその背景について考 える。
共生	グループプレゼン テーション②	多文化共生（日本、ヨーロッパ、北米） ① 「アイヌ民族」 ② 「北欧のサミー人」 ③ 「北米の先住民族」	世界の諸地域における多文化共生の問題点を理解し、今後 の社会形成への展望を描く。
言語	グループプレゼン テーション③	複数の国語・公用語（言語政策） シンガポール、カナダ、ベルギー、 ラトヴィア、手話	公用語や国語が複数ある地域の歴史的背景や多言語社会・ 言語政策の意味について理解する。

プレゼンの順番

	松本	地田	近藤
プレゼン①	環境問題	共生	言語
プレゼン②	言語	環境問題	共生
プレゼン③	共生	言語	環境問題

4. おわりに：学科独自のアカデミックスキルの成果と授業運営上の課題

本稿では、世界共生学部が現行のアカデミックスキルのスタイルを導入した経緯と初年度の実施内容と授業実施後の振り返りから見られた課題点、そして2年目以降の修正点、コロナ禍での実施内容について見てきた。2年目以降、1期ではアカデミックスキルの作法全般についての概要を学ぶとともに、プレゼンテーションでは文献収集と文献の通読からプレゼンテーショントピックに関する「事実」を正確に整理することに焦点を合わせ、2期はグループでのブレインストーミング、グループプレゼンテーションの準備段階での多読の推奨、テキスト資料の読解を兼ねたディスカッションを組み込むことで、1期で学んだアカデミックスキルに関する基礎技術の定着に加え、読む力の向上と文献への取り組みの習慣化を図ることに焦点を合わせた。以降、2期の終了時点で参考文献リストの記載方法、引用方法を含め形式面で大きく改善がみられるようになった。二年度以降、世界共生学科の学生たちの多くが、リージョナルスタディーズ、コース科目、地域創生科目、ゼミなどにおいて、日本の社会問題、多文化共生、国際情勢、各国事情といったトピックに躊躇なくアプローチし、レポートなど文章のかたちでアウトプットできるようになっているということは、一年次での学科独自のアカデミックスキル科目の展開の大きな成果である。

他方、アカデミックスキルの授業だけではなかなか解決が難しい問題、特にグループワークにおけるフリーライダー問題、アクティブラーニング（もしくは他者とのコミュニケーション）を不得手とする学生へのサポート、母語が日本語でない学生の円滑な授業参加、といった問題も浮き彫りになってきている。これらは、学科独自の取り組みだけは限界があり、全学での意見交換やファカルティ・ディベロップメントの機会などを通じて解決していくべき問題だと言えるだろう。